

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）
2018年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職		氏名	
	社会学部・教授		是永 論	
研究課題	家庭におけるメディアの利用を通じた大人と子どもの相互行為実践に関する研究			
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2019年3月現 在	所属研究機関・部局・職		氏名	
	立教大学・社会学部・教授		是永 論	
	立教大学・社会学部・教授		前田 泰樹	
	立教大学・社会学部・助教		池上 賢	
研究期間	2017年度 ～ 2018年度			
研究経費※ (上段:支出金額)	2017年度	2018年度	年度	総計
	2,176,654	574,063		2,750,717
(下段:採択金額)	2,275,000	714,000		2,989,000

※1円単位で記入

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、書籍や新聞などの従来のメディアに加えて、スマートフォンなどの情報機器の利用を通じて、主に家族を中心として住居内で行われる大人と子どものコミュニケーションについて考察することを目的としている。このとき、相互行為を映像に記録し、特定の住環境における空間配置に従って、相互行為が展開する過程に着目しながら、生活上の行動とメディア利用との関係について、エスノメソドロジーの視点から検討する。それにより、メディアの利用が特に子どもの知識獲得に対して、どのような効果を及ぼし得る可能性があり、さらにその可能性に照らして、家庭においてどのような実践が望ましいのかを、特に「学習」という観点から明らかにする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[家庭] [相互行為] [メディア]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

現代社会において、スマートフォンに代表される情報機器の普及と遍在により、生活におけるあらゆる場面においてメディアの情報が関わってくる機会が非常に多様な形で展開している。そうした状況はまた、従来の書籍や新聞・テレビなどのマスメディアによる情報の受容から、インターネットを介した双方向的なメディア利用への移行として、情報と生活の関わりにおける質的な変化をもたらしている。

そして、そのようなメディア環境と情報環境の変化によって現在大きな変化を迎えていると考えられるのが、家庭という空間である。まず、情報の受容やメディア利用においては、従来は主に利用者個別によって受容が行われ、また利用についてもそれ自身に専念した行動としてなされてきた(従来は共同利用されていたテレビについても、近年は録画機能の発展とともに、利用の個別化にともなう多様化が急速に進んでいる)。また、情報の受容ないしメディアの利用それ自体も、利用者個人によって一定の意図をもって意識的になされていた面が大きい。これに対して、近年ではメディアの利用自体は個別であっても、利用形態としても他のメディアや生活行動と並行した、いわゆるマルチ・タスク的な状況が展開している。また、ネットに接続した家電が生活者の情報をビッグ・データとして提供する形になるなど、いわゆる「モノのインターネット化(IoT)」によって、生活行動自体が意図しない形で情報を発信するといった事態も今後生じる可能性がある。

以上のような背景から、本研究は、一般家庭の住居における活動のうち、特に子どもによるメディアと情報の利用がどのような特徴を持ち、また、どのような過程を経て行われるのかについて明らかにする。このとき、両親をはじめとする他の家族構成員が、どのように協同的にその活動に関わり、またその関与が活動の実践についてどのような意味を持ち得るのかについて、メディア以外の活動の分析も含めた形で主に相互行為の構成上の特徴に基づいて検討する。さらに、メディアに関わる相互行為が協同で構成されるときに、住宅としてデザインされた空間の配置が、どのように作用しているのかに特に着目しながら、その空間で営まれる生活行動への展開にどのような影響を与え得るのかについても、相互行為を構成する過程との関わりを中心に明らかにする。

上記のような研究方針のもと、初年度である 2017 年度では、研究組織の各人がそれぞれの専門領域での個別の研究を進行する一方で、共同研究者であるミサワホーム総合研究所のメンバーおよび他大学の研究者とともに、下記の活動を遂行した。

① 定期のデータセッション開催

前年度までを含む、これまでに撮影した家庭での相互行為場面について、毎回 2 名ほどの担当者が分析内容および暫定的なファインディングを映像データとともに報告する各回 2 時間程度のデータセッションを計 9 回開催した

② 調査対象家庭でのビデオデータ撮影の検討と実施

本研究課題の実施にあたっては、スマートフォンなどの情報機器を利用した相互行為場面のデータ撮影を当該家庭には依頼していた。この際に研究データとしての独自の収集方法をデータセッションの機会に合わせて検討した。画面をプロジェクターとして投影しながらタッチ操作が可能な新型の情報機器を導入し、その利用に関する相互行為場面を撮影することにしたが、設置や操作の慣れにより時間を要したため、分析は次年度に持ち越す形となった。

③ 研究発表による分析概念についての情報交換

アメリカ合衆国オハイオ州コロンバスのオッターベイン大学にて開催された、エスノメソドロジー・会話分析国際会議(IIEMCA 2017)において研究発表を行った。発表内容については、主に前年度までに収集したデータをもとに分析を行ったもので、親子間におけるコミュニケーションの特徴をどのように分析するかについて、特に重要となる「成員カテゴリー化装置」という分析概念をめぐり、発表後における海外の専門の研究者と情報を交換することによって、非常に有益な研究上の視点を得ることができた。

④ 海外学術雑誌への投稿を前提とした論文の作成・内容の検討

③における研究報告について海外学術雑誌への投稿を前提に内容の検討を行った。書物を介したコミュニケーションの場面として分析を行ったことは、家庭という空間におけるメディア利用について、モノとしての物的な面から考察を行う上でも、今後において中心の一つとなる研究視点を展開する契機となった。

研究【経過・成果】の概要 つづき

最終年度となる 2018 年度には、研究代表者の疾病のために前年度に実施できなかったデータ収集を行うとともに、シンポジウムでの報告に向けて、これまでの研究成果の集約を行った。詳細は下記の各点に示す通りである。

⑤ 定期のデータセッション開催

前年度と同様に、研究代表者および研究分担者を含む担当者による各回 2 時間程度のデータセッションを計 7 回開催した(4月18日、5月21日、6月25日、9月14日、10月6日、12月7日、翌年1月22日)。

内容としては、片付けや食事の支度の場面における家庭活動に関する学習内容のほか、作業時の姿勢と互いの身体のポジション、成長にともなう親子間のコミュニケーションの変化など、前年度と同様の学習の背景となる対象の分析に加えて、タブレット端末を直接に介した親子間のコミュニケーションのほか、親が別の作業をしている際に子供がタブレット端末を見せるような場面など、学習におけるメディア利用に関わる場面の分析が展開した。

⑥ 調査対象家庭でのビデオデータ撮影に関する専門的な知見についての聞き取り

本研究課題の実施にあたっては、独自にデザインされた住宅と一般の住宅それぞれに居住する家庭を対象として、家庭での情報機器を利用した行動を含む、相互行為場面の撮影を依頼していた。撮影が行われた住宅は、住宅設計に関わる企業の専門家の家庭でもあったので、データ収集と選定にあたっては、設計上の背景や特徴などについて、居住者としての情報を含む形で聞き取りを行った。このとき、実際に分析対象となった場面を一緒に視聴することによって、個々の分析に関する妥当性や現象の背景についてより具体的に把握することが可能となった。

⑦ 国内外の学会参加による分析視点の検討

メディア利用および相互行為の分析については、オーストラリア・エスノメソドロジー・会話分析(EMCA)学会に参加し、研究代表者による「成員カテゴリー化装置」を用いた研究例をもとに、他の参加者と情報交換を行ったほか、国内での社会情報学会への参加により、特に近年のトピックとなっている家庭でのスマートフォン利用や、身体を用いた相互作用などについての最新の知見を参考にしながら、研究データの分析視点を検討した。上述のオーストラリアEMCA学会と広島で開催された会話分析研究会では、身体動作を分析する視点についてさらに洗練した視点を得られただけでなく、学会の参加者を通じて⑧における研究助言者について選定することができた。

⑧ 関東社会学会との共催によるシンポジウム開催

①および⑤のデータセッションの定期参加者により、2つの研究報告内容と、研究助言者2名による討論により構成したシンポジウムを3月10日に日本大学で開催した。第一の研究報告については、前年度の③における報告内容にデータを追加して、家庭空間における親子間のコミュニケーションについてより多面的な角度から検討した。研究代表者と研究分担者によって担当した第二の研究報告においては、本研究課題と直接に関係した形で、親子でタブレットによるインターネット上の地図利用を行っている場面と、パソコン画面で写真の閲覧をしている場面それぞれについて分析した結果を発表した。

このうち特に後者の報告内容を研究課題に対応させて説明すれば、それぞれの場面では、過去に起こった出来事について、画面上の情報を手掛かりに共同で探索する行動が見られていた。この探索については、画面上にある手がかりについて指摘することによって相手の知識を喚起したり、逆に相手との共有知識の状況から、画面上にある情報を順序だてて構成したり、前後の展開を推測するといった活動が相互によって組織化されながら展開する様子として観察された。これらはいずれも、情報の利用に関する学習的な効果を示唆するものである。また、このような活動が円滑に行われる際には、お互いの姿勢や視線の状態などを調整しやすい形で床面が身体動作に関係づけられており、これらの点から住宅の空間的な環境が相互行為における学習の効果と関連する可能性が示された。

シンポジウムには、学会員以外の一般参加についても、ポスターやダイレクトメールなどによって広く呼びかけたところから、通常の研究会から倍増した40名の規模にわたる参加者を記録し、来場者アンケートではいずれも肯定的な評価を得ることができた。

※ この(様式2)に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 論文

是永論, 2019, 「メディア表現の批判と社会批判の実践——ジェンダーの表象をめぐって——」, 『立教大学社会学研究科年報』26号, 7-18頁

② 図書

池上賢, 2019, 『“彼ら”がマンガを語る時、——メディア経験とアイデンティティの社会学』ハーベスト社.

池上賢, 2018, 「マンガ: 媒体と作品の多様化」高野光平・加島卓・飯田豊編著『現代文化への社会学——90年代と「いま」を比較する』北樹出版.

③ シンポジウム開催

関東社会学会主催、立教大学社会学部・ミサワホーム総合研究所共催による研究例会「ワークプレイスとしての家庭: 行動観察の事例分析から」
2019年3月10日、日本大学文理学部

④ その他

Ikegami, Satoru, 2018, “The possibility of an international comparative analysis of the comic reading process”, International Symposium: Mobile Lives, Mobile Media, 立教大学・輔仁大学合同シンポジウム

Korenaga, Ron, 2018, “Telling how texts talk :Research on the practice of Japanese poets at “utakai” meetings”, Australasian Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis Conference

是永論・池上賢, 2019, 「家庭におけるICT利用: 記憶の再生と共有」公開シンポジウム 関東社会学会・研究例会「ワークプレイスとしての家庭: 行動観察の事例分析から」